

サンシャイン渡辺

嵐晶砥介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラブライブ！サンシャイン！！イエエエエエエエエ！！

渡辺曜ちゃんの夢の中を描く、ギャグ短編集です。あくまで息抜きのため、不定期更新で……………完結しました！！！！イエエエエエエエエエエツツ！！！！

目次

サンシャイン渡辺	1
野○村さんなヨシコちゃん	4
ドラゴンルビィ	10
第九感の使い手ちかつち	15
とつとこハグヤロー	20
クール千歌	28

サンシヤイン渡辺

今日からアアアア！イエアツ、a q o u r s！サンツシヤイン！渡辺！

イエエエエエエエエ！！

どおーもっ！！空前絶後ノオ！超絶怒涛なa q o u r sのスクールアイドル！

制服を愛し制服に愛された女ああ！！

セーラー、ブレザー、ロツソネロ、すううべての制服の生みの親ああ！！人呼んでコ

コ・シヤネル10代目の三回転半抱え込みフアツションの生みの親アアアア！！！！

そう私こそはアツ！……例えこの身が朽ち果てようと……制服を求めて魂を燃やし、

燃えた魂は星となり見るもの全てを制服でヨーソロオオオオ！！

みんなご存知そうっ私こそはアツ！！

……サイツキョー無敵のスクールアイドルツツ！

あまりのポテンシヤルの高さにチカちゃん、リコちゃん、ハナマルちゃん、ルビィちゃん、カナンちゃん、マリさん、ダイヤさん及びヨシコちゃんを除く内浦在住の全ての人

間から命を狙われている女アアアア!!

………そおうつ私こそはアア! テエエンカ無双のスクールアイドル!

あの天下一の渡辺を決める大会、ラブ渡辺ツデエエ! サブマリン投法とか戦場カメラマンとかAKBのツイント担当を抑えたセミファイナリストオオオオ!!

そおつ、この私はア!

………身長157センチ、体重はヒミツだけどスリーサイズは上から82ツ57ツ81イイイイツ!!

長所は元気な美少女なところオオオオ! 短所は要領良すぎなところオオオオ!!

制服界に舞い降りたギャングオブヨーソロオオオオ!!

そおう、この私はあー!

………四月十七日生まれえ! 出身地はお母さんツ! 家族構成ツ父・ポセイドン渡辺エツ!
母・ガイア渡辺エツ! 兄はいなあああいツ!!

そおしてつ、みんなお待ちかね長女で末っ子!

この私はあー! a q o u r s ! サンツツシャイン! ワツたしの夢はアアア! 駿河フェリーで船長やつてる父・ポセイドン渡辺の跡を継ぐことおおおおおお!!

父の月給百万円! 貯金残高五百六十二万八千二百円! キャッシュカードの暗唱番号4036! 沼津市在住の方々あつ! 今がチャンスでエす!!

野○村さんなヨシコちゃん

また、夢を見た。

墮天した衣装の、墮天使ヨシコちゃんがいた。
何やら、私の前で何かを始めるつもりであります。

「よくぞ召喚されたし、我がリトルデーモンよ。暗澹たる黒き魔術の契約に従い、我の叡智を傍聴する権利を授与しよう。

それでは先ず、そこに墮ちている黒檀の異装を身に纏い墮天せよ」

「……えつと、何言ってるかよく分からないから、後ででもいいかな」

「今、身に纏いなさい」

「今じゃないとダメ？」

「……………身に纏いなさい？」

「こわいこわいこわい、何だこのヨシコちゃん。私は仕方なく、黒いローブを羽織るの
であります。」

「とうわけで聴きなさい……。私の愚痴を」

「拍子抜けすぎる」

「……」

私のひねりのないツツコミを無視し、ヨシコちゃんは興奮気味に語り始めたのであり
ます。

「私ね、普通の高校生として、なんというかね、中二病が恥ずかしいって指摘はちゃんと
受け止めて、それなりに取り繕って過ごそうとはしているけど。」

とにかく私の中の『墮天使』という大きな要素の、社会的有害性を顧みれば、指摘は
しつかり受け止めなければ、一生非リアのまままで人生終えると思うんですよ！

でも、私は墮天使だから……。小さなデーモン……。リトルデーモンたちが大好きで大好

きで……ですから、非リアなのがもう申し訳なくて」

よく分からんけど、なんか可哀想な雰囲気であります。

「こんな墮天使だから、リトルデーモンの皆様。

私も死ぬ思いで、もう死ぬ思いでもう、あれですわ。

一生懸命に墮天に墮天を重ねて、見知らぬ人間にドン引きされて、やつとリトルデーモンの皆様に認められて名声を博したワラワラ動画の生主であるからこそ、こうやって世間の白い眼に晒されるのが、本当に辛くて、情けなくて、リトルデーモンの皆様に申し訳ないんですよ」

ヨシコちゃんの唇が、ワナワナと震え出し、今にも泣いてしまいそうです。

あ、ついに涙がこぼれたであります。

「ですから……世間様のご指摘を丁寧に受け止めて、墮天使という矮小な、クツ、カテゴリに比べたラア……ラア、ブッフファア……ッ!!」

え、ちよ、よ、ヨシコちゃんの様子が！なんと彼女、突然地べたに這いずって喚き泣き散らしはじめたのでありますうううう!!?

「ダアツ、だ、墮天使ヨハネ、ダツツテンシヨハネの、活動ノオオーツ、ウエエ折り合
いをつけるーつてコトデ、もう一生懸命ほんとに、邪気眼発症、中ニイイイ病ツハア
アアアツ!!

中二病という病はー！私のみなウワツハッハーーン!!私のみならツハアー！私の
みならず、非リアにありがちな不治の病じやないですか!!

そういう問題ヒヨオツホー!!解決ジダイガダメニ!

私ハネエ！ブツツフンハアアア!!

誰がね、え！非リアが誰にリア充になりたいってオナジヤ、オナジヤ思つてえ
!!

ウーツハツフツハーーン!!ツフーン！ずっと墮天してきたわけですわ！せやけど！変
わらへんからそれやったらワダチが！リア充になって！文字通り！アハハーンツ!!命
懸けでイエーヒツファ、ー！ー!!!

ウツ……クツ。曜先輩！あなたには分からないでしょうけどね！平々凡々とした非
リアライフを送って、本当に、「非リアがリア充になりたいって一緒や、非リアがリア

充になりたいっていつても」じゃあ私がああ!!リア充になって!

この世の中を!ウグツブーン!!ゴノ、ゴノ世のブツヒイフエエエーン!!!」

最早、意味不明であります!

「ヒイエーッフウンン!!ウウ……ウウ……。ア、ー、ー、ア、ッア、ー、ー、ー!!!」

ゴノ!世の!中ガツハツハアン!!ア、ー、世の中を!ウ変えダイ!!その一心デエエエエ!イヒーフツハウ!一生懸命墮天して、墮天使に、縁もゆかりもないリア充に認められて、リア充ライフ謳歌したかったんですうう!!」

「分かった、分かった分かった!分かったから少し落ち着いて……」

「はあ、はあ……」

陰惨たる無様を詫びよう。リトルデーモンよ、あーもうつとりあえず私おうちかえるー!ウワツハーン!かえるナツシイイイーホワアアア!!!梨汁プシャー!!!」

ひぎやあああつ本格的にヨシコちゃんが壊れたああ!!?

いろいろな意味でヤバイ、なんか危険でありますうう!!逃げないと!逃げないとおおお!

そして、いつの間にか世界がぼやけ、私は目を覚ましたのであります。
なんだか、ヨシコちゃんに謝らねばならない。そんな責務を感じた朝でした。

ドラゴンルビィ

多分、私は疲れているのかもしれない。

「おいそこのヨーソロー」

「え、ルビィちゃん？なんかキヤラが」

「うゆ、もつと強くなりてえ」

「え？」

「強くなつて海賊王になります」

「いや、意味がわからん」

「高き理想には常に不理解が付きまとう。うゆは泣かない」

「ルビィちゃんが壊れてる」

ダイヤさんが滑り込んできて、ルビィちゃんの前に立ちはだかったであります。

「ルビイ、貴女の覚悟、しかと受け止めましたわ。ですが、海賊などという黒澤家の名に汚泥を塗す如き所業を見過ごすわけには、長女として、断じてできません」

「おめえ、うゆに逆らう気か？」

「くつ、これが『週間少年ジャンプの暗黒面』に呑まれた者の末路とでもいうのですか……！仕方ありません、かかってきなさいルビイ。姉妹の格の違いを教えて差し上げます。そして私は、貴女を救う！」

意味不明であります。

「強い言葉を使うなよ、弱く見えうゆぞ」

「ふつ、上等！ズームパンチ！」

「びぎ た あ」

「やったか!？」

「ダイヤさん！それはやってないフラグだよ!!」

「む、曜さん。余計なお世話です、これは私たち姉妹の問題」

「いやいやいや、シリアスなどこ申し訳ないけど、何してるんすかマジで!!」

「言葉を喪った人間は拳で語る他、道は無き、つまりそういうことですわ」

「どういふことだ」

そうしてゐるうちに、ルビィちゃんは立ち上がりました。

「お姉ちゃん、まだまだだね。命が惜しければ、その無駄な胸の脂肪をうゆに分ける
べい」

気にしてたのかルビィちゃん。

「ふ、未来は未知数。貴女にも幸があることでしよう、ただし、正しい道でなければなら
ない……！……ふっ！」

また、ダイヤさんが仕掛けたであります！

「くらえっ、お姉ちゃんキック！」

「うゆにそんな蹴り効かぬ」

ルビィちゃんがガードをしたその時、ダイヤさんが開脚蹴りでルビィちゃんのガード
を外して、十字手刀を……！

「かかったなアホが!!サンダークロススプリットアタック!!」

そして、目が覚めました。

あの姉妹を今日見たら、夢の内容を思い出しそうで嫌ですな。

第九感の使い手ちかつち

明日は千歌ちゃん誕生日、ワクワクしながら眠ったのでありました。

千歌ちゃんの部屋で私たちは、グダグダしていました。

「曜ちゃん、第六感って分かる？」

「霊感？」

「せいかーい、じゃあ、第七感！」

「そんなのあるの？」

「知らないなんて、ダメだなあ曜ちゃん。小宇宙コスマモだよ小宇宙コスマモ」

千歌ちゃんが、ぶーつとほおを膨らまして私を非難するであります。小宇宙コスマモってなんじゃ。いや、知ってるけども。聖闘士の力の源って知ってるけども。なに、何言ってるの千歌ちゃん。

「曜ちゃん、第七感っていうくらいだから、感じるんだよ。君の心の小宇宙を。抱きしめて、熱く燃やして、奇跡を起こすんだよ」

マジで何言ってるんだこのミカソ。

「じゃあ千歌ちゃんは、小宇宙コスモを感じたことがあるの？」

「当然。第八感を見るがいい！はあああああ!!」

「七つて言わなかった!？」

「むっ!?!何っ……!この第八感……ッ……深い!?!ズボボボボオツ!ツツボボボオツ!!」

「突然どうした!」

「曜ちゃッ……助けズボボボボオツ!!私は………ボボボオツ!私はまだ、死にたくない!!」

「千歌ちゃんーん!?!」

千歌ちゃんがなんか一人で楽しそうに盛り上がって、地上で溺れ死んだであります。

「千歌ちゃん!それは冗談キツイよ、千歌ちゃんーん!!」

「ただいま曜ちゃん!」

「ぎゃーっ生きてた!?!」

突然目を見開いて起きる千歌ちゃん。ぐぬぬ、心配させやがって、こちとら半泣きであります！

ヘラヘラしてるし、ムカつくであります!!

「聖闘士的に第八感は冥界への扉だからね、ちよつくら死んで行ってきたよー」
死んで冥界に行くなよ！

「あとね、曜ちゃん。第九感って知ってる？」

なんでありますかそれは。

「み感」

「今度こそふざけてる！」

「マジだよ曜ちゃん！」

ぷーっ、とおおを膨らませてミカンみたいになる呑気な千歌ちゃん。超常現象が連続しているので、私はかなりパニックであります。

「じゃあやって！み感やってみろやあ！」

「疑ってるね曜ちゃん」

「デカみかんカーニバル」「いやいや！ちよ待ておまくあ w s e d r f t g y ふじこー p それ以上の狼藉はこの私が許さな」「曜ちゃんもすつげえヨーソロー」「あゝあゝあゝあゝあゝやめろおおお!!」

ついに、我慢の限界に達した私は、ドロップキックで千歌ちゃんをぶっ飛ばしたであります！

む、どうやら正気に戻ったであります

「どうだった？み感の味は」

「最悪」

誕生日の土産話には、少々過激すぎるので、この夢の話は私の中で封印しておきましょう。

とつとこハグヤロー

真夏のホラーであります

とつとこ爆走

ハグヤロー

すみっこ爆走

ハグヤロー

大好きなのは

鞠莉を鯖折り

——— なんてありますか、このヤバい歌は。どこからともなく聴こえてくるであります！心当たりはありますけどね！

「やっぱりー、ハグるよハグヤロー………おはよう曜ちゃん」

「やっぱり果南ちゃんだ！やっぱり果南ちゃんだ！」

「二回言うとは」

「大事なことだからね！」

「まあいいや、聞いてよ」

「なにかあるの？」

「最近、プロレス鑑賞にハマってねー、素晴らしい技だなんて思って」

まさか

「そ、それは何かな」

「ベアハツグ
鯖折り」

「そうか……それは良かったね」

「それでね、私もあんなハグができる様になったら楽しいなって……」

——
だから

「ひひひひひひ!!」

あゝあゝあゝあゝあゝ 全速逃走ヨーーーーーソロオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

めっちゃハグする エースが通る

ハグレものゾと 内浦騒ぐ

超々ハツグ

(超々ハツグ)

ハグハグハツグ

(ハグハグハツグ)

私の噂で しいたけサンバ

それにつけても曜ちやんなんの

ハグのひとつで キリキリ舞いじやん

ダツシユ ダツシユ ハグ

ホールド・エンド・ハグ

いつかキメるぜ 鯖折り曜ちゃん
そんなとき私や

スーパード・ヒーローさ

ダツシユ ダツシユ ハグ

ホールド・エンド・ハグ

燃えて青春 駆けハグる

変な歌を歌うんじゃないやねえでありますー！！

ん、あ!!ちようどいいところに鞠莉さんがいたー！！めっちゃヤバイ関わりたくな
いって目でこっち見てるー！！

「果南ちゃん諦めて!!あそこに鞠莉さんがいるでしょ!」

「鞠莉、ハグしよ」

「オー……ツマイガー……!!?」

そして、私と鞠莉さんは共にダッシュユであります!!

「曜オオオオオ!! 私を売るのがデエエスカア!!!?」

「鞠莉さんはハグ慣れしてるでしょうが!!」

「ダメで……!! 果南のペアハグをもう一度受けたら私は死にマ……ス!!!」

「ハグを……ハグをくれ……!! 渇きが、死ぬ、渴いて……う……う……う……!!!」

「ノオオオ!! ハグを渴望するあまり狂化したデエエス!!!」

「ハグ、しよおおおおお!!」

「ぎゃあ……!!!?」

人間業とは思えぬ跳躍で私たちは捕らえられ、そして、ハグを……

———と思ったところで、私は跳ね起きました。恐怖で震えが止まらないであり

ます。

真夏の怪談に、千歌ちゃんに話そうと思います。

クール千歌

鞠莉ちゃんが部屋に、一つ、千歌ちゃんによく似た、膝の丈ほどの小ささのメカ人形を置きました。その名もクール千歌。なんでも、最新鋭の学習機構を積んだAIらしく、適宜正確な応答を出せるそう。早速、初日から使用者が続出であります。

おや、花丸ちゃんが血相を変えて飛び込んできました。何事だろう。

「千歌ちゃん千歌ちゃん!! 大変だよお!! ルビィちゃんが飴を床に落として割ってがん萎えしてるぞらー!!」「我が心に一点の曇りなし……飴が正義だ……去るがいい……!」つてキャラ崩壊しながら図書室に籠ってるぞらー!! あれは心が曇天に腐りきってるゲロ以下の臭いがプンプンするぞらー!!」

長いしメツチャ暴言なんですけど!! こんな子だっけ花丸ちゃんて!?

私のツツコミでは最早役不足!!

しかし、ここは『クール千歌』こと千歌ちゃんメカ。最新鋭の技術は伊達じゃない!

「なあーにいいー!!? やっちまったナーーッ!!」

目を赤く光らせて、絶叫するのはクール千歌。なんでも、音声は千歌ちゃん本人がアフレコしたらしく……よく引き受けたなあ。

しかひ! あ、囁んだ。しかし! この後、花丸ちゃんは自ら考えた答えをクール千歌に言わなければならぬのであります! 正解するか、逃げ出すまで、クール千歌は同じセリフを言いつづけるのであります。地獄! 圧倒的責め苦! 花丸ちゃんは果たして耐えられるのか!?

製作を指揮した鞠莉ちゃん曰く「答えは自分で見つけた方が勉強になります!!」だそうで……。

「じゃあ、花丸ちゃんは黙って!?!」

「ル、ルビイちゃんのそばにいる!」

「ブツブツですわああwwww」

「ずらあ……」

あ、煽ったであります!

製作を指揮した鞠莉ちゃん曰く「煽ることで負けん気を沸かせまーす!!」だそうです。
ダイヤさんに聴かれても私は知らないからね!?

それにしても、ムツとした花丸ちゃんの表情も可愛いですなあ。

「花丸ちゃんは黙って!?!」

「飴玉あげる!!」

「惜しい!そこまできといて答え出ないとかバカなの!?!あ、バカだったww」

「な、ななな、なにを言うズラアー……ツ!!許さん!!」

激しく煽るクール千歌。ついに憤怒の花丸ちゃん、意外と煽り耐性が無いところも可愛い。
愛い。

「花丸ちゃんは黙れ!?!」

あ、暴言。

「もういいぞこのバカロボット!!飴玉買ってくるズラアー……ツツツ!!」

「なあーにいいー!!? やっちまったナアーーツ!!」

こんなにもどうでも良い質問にも応対するクール千歌。意外と優しい仕様なのかもしれない。

「梨子ちゃんは黙って!？」

「隠蔽!!!」

「……………」

「……………」

「……………はあく……………」

「ま、ままままま!？」

呆れた様なクール千歌のため息に、文字通り二の句を言えない梨子ちゃん。なんか憐れみが深い。

「梨子ちゃんは黙って!？」

その後、低評価続出で、部室からクール千歌ちゃんが撤去されたことに関しては、まあ。当然の摂理といえますか。

そして、目を覚ませば、窓の向こうに朝ぼらけ。
悪夢にも慣れた私の日常は、これからも続く……………

〈 f i n 〉